

創立60周年を迎えて ～新たな出発へ～

公益社団法人 日本バリュー・エンジニアリング協会 会長
公益社団法人 日本ユネスコ協会連盟 理事長

鈴木 佑司



風薫る5月となりました。このところ気候変動が激しいので、読者の方々がこの拙文を読まれる頃、実際に爽やかな気候となっていることを心から祈ります。

さて、日本バリュー・エンジニアリング協会は、今年で創立60周年を迎えました。人間で言えば還暦です。赤いちゃんちゃんこを着るのは、赤子に還って新たに生まれ変わるという意味があるそうです。人間ではありませんが、組織としての還暦を迎え、新たなスタートを切るべき節目の年と捉えています。

節目といえ、今年は戦後80年であり、昭和で数えると100年という節目の年だそうです。色々な意味で節目の年になるわけですが、それだけに過去の延長線ではない、新たな形、新たな取り組みを目指していきたいと、気を引き締めています。

振り返りますと、わが国にVEが初めて紹介されたのは1955（昭和30）年、日本生産性本部が米国に派遣した「原価管理視察団」の視察報告とされています。団長を務められた東芝の西野嘉一郎専務（当時）による報告会には500名を超える聴衆が集まり、彼が報告したVA（VEと同義）には質問が殺到、大手メーカーから続々と講演依頼が舞い込んだそうです（参考：橋本寿朗『戦後の日本経済』）。

それより少し後の1959年、産業能率大学の上野一郎理事長（当時）が、ブレイン・ストーミングの考案者であるアレックス・F・オズボーン氏から招かれて米国バッファロー大学を訪問し、VAの講座を受講されました。その際にVAに関する様々な資料を持ち帰り、産業能率大学にて研究活動を始められたことが、わが国産業界に対するVE普及の礎となりました。そして、上野理事長をはじめ、同大学の玉井正寿先生、土屋裕先生などのご尽力により弊会が創立されたのが、東京オリンピックの翌年に

あたる1965年のことです。

1967年には、産業能率大学が米国レイシオン社のVE担当取締役F・S・シャーウィン氏（当時）を招いて「国際VEワークショップ・セミナー」を開催し、国内でも早くからVEに注目していた企業から75名が参加。わが国におけるVE普及のエポックメイキングとなりました。

折しも日本の高度経済成長期、VEは産業界において急速に広まり、さらに1970年代のオイルショックや1980年代の円高ショックを克服する際にもVEが活用されました。弊会の役員及び会員の皆様のご支援によるところも大きなものでありました。また、東京理科大学の田中雅康先生のご貢献もあり、原価企画とともに多くの企業にVEが導入されました。

しかし、バブルが崩壊した1990年代以降、さらに2000年代に入ると、リーマン・ショックや東日本大震災、記憶に新しいコロナ禍などが続き、日本は「失われた30年」と言われる停滞期を迎えます。一方、SDGsやESGの浸透により、世界中の企業は環境問題や社会課題の解決に貢献することが強く求められるようになってきました。このような社会環境の変化に対して、VEも時代の要請に即して本来のあるべき姿を再認識し、新たな形へと拡張・進化していく必要があります。

そこで弊会では、「社会に新たな価値を生み出し、多くの社会的課題を解決するために、VEを新たなステージへと進めていく」ことを直近数年の基本方針とし、それを実現する人財として「バリューデザイナーの育成」を重点課題として掲げております。

立命館大学の澤口学先生のお力添えもいただきながら、今後とも鋭意努力してまいり所存ですので、引き続き皆様のご支援を賜りたく、何卒よろしくお願い申し上げます。